



自らのキャリアデザインを考える

出身の地方大学の研究室を主宰してこの春で8年になり、これまで研究室からは23名が巣立っていった。ほとんどの学生達は、第1希望とする職種に就職でき、それは私にとっても嬉しいことではあるが、博士課程に進学する学生が一人もいないことが悩ましい。新卒採用の就職活動における売り手市場のなか、大学の用務に翻弄されている私の姿を見て、大学という職場環境はブラック企業と映るのであろうか。それとも、大学というのは大学4年間と修士2年間で終わりと考えているのであろうか、私としてはもっとサイエンスに打ち込んで欲しいと思っている。

大学1年生を対象にしたオムニバス講義「キャリアパス」の一コマを担当することになった。与えられた講義のサブタイトルは「自らのキャリアデザインを考える」というもので、自分の進路を見据えて、今、すべきことは何か、ということを考えさせるものである。私が大学1年生の頃は、授業以外の時間は、部活動とアルバイトに没頭し、自分の将来の進路なんか全く考えてもいなかった。専門教育が始まる2年生になると、学内や学外の先生方から分子レベルで次々と明らかになる生命現象の素過程について話を伺える機会が増え、研究の詳しいところは分からないが先生方のエキサイティングな姿を見て、サイエンスというものは何か面白いものだな、とを感じるようになった。丁度その頃はバブルが崩壊し、景気が鈍化していく社会情勢のなか、雇用環境が厳しくなっていった時代であった。そのような状況でも修士や博士修了後の節目では企業に就職することも少しは考えたが、学内外の先輩方に囲まれて苦しくも楽しく研究することができ、自然とサイエンスに没頭し現在に至っている。このような経緯から、1年生に何か指南をする資格もなく、ましてや学生全員が私のような科学者を目指している訳でもないであろうし、何を喋れば良いものか非常に悩んだ。

取り敢えずは学生にアンケートをおこない、集計結果を共有しながら授業を展開する形を取ることにした。その結果、約8割の学生が大学を卒業して就きたい職業を考えている、あるいは、何となく考えており、その中の多くは企業の研究開発職を志していることが分かった。また、仕事に求める要件のなかに、安定した給与や福利厚生について言及している学生が多かった。このあたりが、学間に興味が持てても博士課程への進学をためらう要因の一つになっているのではなかろうか、と考えている。まずは企業に就職し、生活の安定を保証してから学位を取る。これも一つの選択肢であろう。最近、企業でも学位が必要になっていると聞く。学位は、研究開発を取り扱う者にとって名刺代わりのものであり、私の大学でも企業や官公庁に所属する方が、社会人大学院生として研究に励んでいる。ただ、私としては、研究開発職を志す学生には修士課程から博士課程に進学し、研究者としての基盤をしっかりと整えてから社会に旅立って欲しい、さらにチャンスがあれば外国に留学し研鑽をして欲しい、と伝えている。留学は、異文化で育ってきた研究者が集まり交流できること、海外だからこそ新しいテーマにチャレンジができる環境であり、研究者としても人間としても大きくなれるチャンスである。最近では、博士課程の学生や留学を対象とした奨学金も整いつつある。博士課程の学生を対象とした就職状況がもう少し広く安定したものになれば、博士課程に進学する学生も増えるのではないかと期待している。

常日頃、学生には言葉を大切に、コミュニケーション力をつけなさいと説いている。担当する生化学や細胞生物学等の授業に先だって、概論として最新の生命科学の概要を説明した後、それを理解するためには何を学ぶ必要があるのかを考え、その周辺についても学び理解するように促している。本年度から教務委員を拝命し、社会に貢献できる科学者たる人材の育成に取り組み始めた。教務委員が担当する学部授業では、大学教授、研究機関の室長、企業の部長クラスの卒業生をお招きしてロールモデルとしてお話を伺う時間を設けている。このような取組みが実を結ぶのはしばらく先になるが、一人でも多くの科学者を育成することは、大学の研究力の活性化と地域貢献に結びつくと感じている。

(ももた)